天声人語

猿芝居、猿知恵、猿まね。どうも猿はかんばしくない言い回しに登場することが多い。猿の尻笑いは、自分の欠点に気づかずに他人の欠点をあざ笑うことをいう。類縁関係の故なのか、扱い方が冷淡すぎないかと思ってしまう▼もっとも、災いが去る、病が去るというように、同じ音の言葉をかけて縁起のいい文脈で使われもする。赤い下着の売れ行きがいいという話が、この年末年始の紙面にあった。申年に身につけると健康で過ごせる、といった言い伝えが各地にあるという▼猿を神様の使いとして、古来大切にしてきた神社もある。東京・赤坂の日枝神社はその一つだ。境内に神猿の像がある。「まさる」と呼ばれる。魔が去る、何事にも勝る、となって信心を集める。猿は縁に通じ、縁結びの御利益もあるといわれる▼むろん、申という字に猿の意味はない。漢和辞典編集者の円満字二郎さんによれば、もともとは鋭く光る稲妻を描いた甲骨文字だったという。ピカッと光り、地上に向かって伸びることから、相手に何かを伝える意味で使われるようになった。申すであり、申請、申告、内申書である▼漢字研究の故白川静さんによれば、申は当初、神そのものを意味した。稲妻が屈折しながら天空を走るのを、太古の人々は神のあらわれる姿と考えたらしい。日ごろ何も考えずに書いている字が、にわかに神々しく見えてくる▼申の字の来歴と、猿を神様の使いと見ることとは関係がない。しかし、これもご縁と思いたくなる。

2016・1・5

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。